J. Rakuno Gakuen Univ., **33** (2) : 137～148 (2009)

本庄陸男作『石狩川』における自然表現の変化について
── 環境文化論の視点から ──

岩　井　　洋*

Transition in the Expressions Concerning Nature in Mutsuo Honjo's *Ishikarigawa*:
── From the Perspective of Environmental Cultural Science ──

Hiroshi IWAI*
(Accepted 13 January 2009)

目　　次

はじめに　嵐の時代
1．家臣団主義
2．植民者の視線
3．作品の非融和的自然表現
4．作品終末部における融和的自然表現
5．岩出山帰郷における〈ふるさと〉との離別
6．実証主義者堀盛
7．北方系自然との対峙と個人主義の成立
8．おわりに　共同体主義(コミュニタリアニズム)

はじめに　嵐の時代

明治初期北海道開拓には，戊辰戦争時における反政府行動に対する懲罰，労働力確保，北方防衛という，江戸末期から明治にかけての日本史上最も激しく揺れ動いた時代ならではの課題のため，多くの人々が送り込まれた。

岩出山伊達邦夷家臣団は，仙台伊達藩の方針の下で,「早くも同じく三月には奥羽鎮撫の征討軍が起された。順逆の態度を考えるひまもないほど，ことは矢つぎばやに起った。」[1] そういう状況のなかで，彼らは敗者の道を選択し突き進んでしまった。

その結果としての彼らの集団移住は，不合理な時代の不合理な流れを背景にしている結果，半強制的な性格をもつものだった。維新後，伊達邦夷（史実では邦直）家臣団においては，その禄高1万5千石が65石に削られ,家臣760名がその士籍を剝奪された。その上に岩出山の地には南部藩士たちが転封(てんほう＝国替え）されて入って来た。二つの家臣団が岩出山に同居する混沌状態となったのである。

明治新政府のこうした政策もあって，岩出山の地から半強制的に追い出されたという無念の思いは，家臣団同士の結びつきを一層強固なものにしていた。彼らは「脇差だけは離し兼ねていた。」[2] のであった。

従来は，〈尚武の気風〉のなかで，武士は常に戦士としての肉体の鍛錬と精神修養が幼少時より求められていた。ロシアがその伝統的な南下政策を頻繁に繰り返し兵隊を具体的に展開していたため，明治初期における北方防衛は，強力な戦闘力を保持する者たちを緊急かつ多数必要としていた。〈北門の鎖鑰〉というに言葉には，当時の軍事的緊張感が背景をなしていた。

精神的にも強固なつながりとまとまりをもつ岩出山家臣団は，強固な武装集団であり，北方防衛の充実拡充の先兵でもあった。と同時に，開拓空白地が大きく広がる北海道の，農業による開拓の推進という点でも，農業の直接的・間接的経験者の多い彼らは，極めて有能な集団であった。岩出山伊達邦直家臣団は，北海道における当面の大きな課題に適宜対応することのできる，新政府にとって使い勝手のよい人材集団であった。

1．家臣団主義

「所詮滅び行く武士であるというならば,ただわれらは，殿のお心ひとつです。」[3]

江戸期における藩・支藩の武士家臣団とは，日本歴史でも最も強固な結びつきをもつ祖霊信仰を中核とする共同体であった。主君邦夷に対する阿賀妻謙(史実では吾妻謙)ら家臣団の忠誠心は強固なものが

* 酪農学園大学環境システム学部地域環境学科環境文化論研究室
Faculty of Environmental Systems, Departmennt of Regional Environment Studies, Seminar of Environmental Culture
069-8501 北海道江別市文京台緑町 582 番地
582 Midorimachi, Bunkyodai, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501, Japan

あり，そこでは自分あるいは自分の一門や一族さえをも超えて，邦夷の一家・一門の安泰を図ることが最大の目的であり使命とされた。

日本において〈国〉という概念が自然に機能し存立していたのは，戦国時代の戦国大名から江戸幕藩体制下の諸藩の領国においてのみであった。国家はその本来的姿において，国家を構成する者たちそれぞれが，全体としての人間的な関係と全体のまとまりを，あくまでも自然な精神性をもって保持していること，それが国の自然な形態である。地域共同体としての一定の経済的自立性や内なる求心性，さらには地縁・血縁という不自然性や強制力を持たない共同体性が，国に必要とされるのである。

その意味では，江戸期の大名領地つまり諸藩は，それぞれ小さな国を形成し，日本全体は17世紀末には243の藩領地(知行地)，つまり国に分割されていた[4]。

そうした国の中核的存在が家臣団であり，強固な軍事機能と主家の安泰[5]を願う心により，縦･横に有機的に緻密に繋がる集団であった。それは，江戸期の鍋島藩士山本常朝の倫理書『葉隠れ』が象徴するような，「主君の気持ちは家中の倫理」[6]という主君を崇める家族的共同体でもあった。そして家臣団の武士たちは，地域社会の頂点を形成する特権階級であった。

「その日その日の明け暮れが，人々の心を刻々と郷里に追い戻していた。郷里を思うことはむかしの生活をなつかしむことであった。あたえられた俸禄を食んで，無為に暮した日を追想することであった。」[7]

しかし，彼らは〈土民〉つまり土の民的立場に就く者も多かった。

「仙台藩の藩士は，政宗のむかしより地方知行をもって封禄を頂戴していたから，士分であっても平時は農耕の生産業務に就いていた。岩出山の大部分の家中も半農半士といわれる一種の屯田制の形態をとっていて，高禄者は小作人をその土地へ入れて耕作をやっていた。」[8]

江戸期の藩は，農業わけても稲作生産を基盤にした農業共同体であった。知行制度は，家臣団の藩士がそれぞれの知行（領地）を所有し，知行地の農民から年貢を得てその禄を食む体制であった。それは例えば，北海道のかつての不在地主制度に近い，武士による直轄領地支配の制度であった。上位の藩士には，小作人にのみ農業労働に従事させるものもいたが，下位の藩士には自ら農耕を行う〈半農半士〉の者が多かった[9]。

伊達藩の家臣団は農業生産に直接・間接に関わるものが多かった。彼らのなかには農村部に居住する者も多く，ほぼ全員が農業労働の農民に近い場所・立場で生活を送っていた。伊達藩の家臣団が，明治維新後に北海道の諸地域に移住し，新しい時代においてもすぐに農業を生活の糧として時代の激変に即座に対応し得たのも，そうした〈半農半士〉の歴史があったからである。

ただ，岩出山は，あくまでも温順な自然風土とその上にはぐくまれる稲作を基盤とする農業を担い続けており，そこの自然風土は，人々の生活の質に十分適うものであり，人と一体化されえるものと受け止められていた。

2．植民者の視線

18世紀中期のイギリスに始まる産業革命は，古来から続いてきた農業社会から，農業を含める大量生産様式を基本とする工業社会への，人類史上最大の転換であった。それは産業上の変化のみならず，産業上の変革に必要な政治・経済・社会そして文化における抜本的変革を伴うものであった。こうした変革の波は，〈資本の論理〉という大戦争をも含む冷徹無比な歴史ロゴスとして，ヨーロッパから澎湃として起こり，世界各国の前世紀的社会体制を次々と崩壊させ，産業の大革命を支え担い貫徹する体制へと世界を確実に激変させていった。

そうした産業革命のグローバルな躍進の波は，19世紀初頭の日本をも襲い，それが日本の開国，明治維新による産業立国型形態の確立，北海道開拓によるいわば実証主義的豊かさの簒奪のための人々の移住という，一連の大変化を生み出すことになる。日本の重工業・軽工業化における工場生産の資源・エネルギー源の供給基地，人的資源を支える農業基地，南下政策を図るロシアはじめ世界の列強の植民地争奪に対する自国内植民地確保，それらが不可避に自国内植民地北海道の開拓を強いたのである。つまり岩出山家臣団の北海道移住は，産業革命が招いた必然的な出来事の一つであったのである。

人間が他郷へ移住するということは，自分たちにとって自然･文化的異界の地に移住することである。19世紀から20世紀初めにかけては，上述の理由から多くの自然な未開地が，〈異界･他界〉という名で発見された時代でもある。その際の新たな地での人間の意識が選ぶ立場には主に二種類ある。移住先の地域を，それまでの生活地域のあるべき文化レベルや文明性から見て，遅れたあるいは劣ったレベルの地と見る発展史観の価値意識，つまり自分の本来の

母国の地と移住先の地とを相対化し比較して，移住地を従来居た地に比してより遅れた地という非本来的な価値判断をくだすということ，それが植民地主義である。それは，これまでの共同体とその地に精神的に呪縛されつつ，異国の現地で得た利益をこれまでの共同体へ常に還元しようとする植民者の立場である。

「植民地主義は，こうした見る側，支配する側の植民者と，見られる側，支配される側の被植民者との間の，存在論的あるいは認識論的な断絶によって威力を発揮することができたのである。」[10]

植民者の立場とは，母国の価値観にこだわるあまりの，移住先地の文化風土に対する共感・共鳴・関心の不在であり，移住先地の自然と断絶する視線のあり方である。

それに対しもう一方は，新たな移住地に生活の根拠と自己アイデンティティを確立し，その地の自然風土や人と融和し順応する価値観を構築し，ローカルな視線を持ちその文化・風土の価値観に準じて生きる，まさにディープエコロジカルな地域生命主義に立脚する立場である。

「抑えていた郷愁がぱッと跳ね起きた。見えも外聞もなく，生れたその土地を見その空を仰ぎたいのであった。(略)。── 帰りたい，帰ってみたい，と，そう思わなかったことは一日も無かったのだ。」[11]

「祖先の位牌に申しわけがない」[12] という祖霊信仰と氏神の地域信仰と，分けても地域支配者である主君信奉という，見えない精神の絆によって強固に結ばれた岩出山家臣団は，人跡未踏の北海道の原生林の奥の地にて，風光明媚な温順な風土に支えられ育まれた岩出山イデオロギーの見えない呪縛に捕らえられ牽引され生きていたのである。

そもそも江戸期までの人々は，生まれ生きそして死ぬ自らの一所懸命の地に対し，肉体的のみならず精神的にも強く呪縛されていた。肉体的呪縛以上に精神的呪縛の方こそが，人を動かす根拠たりえる。祖霊や地域の氏神信仰や素朴な自然信仰といった土地アニミズムの精神現象のなかに，土地に対する人々の強い執着が認められる。

神道イズムが土地の地霊にその源を持つように，自然信仰と地域の氏神信仰と主君信奉による精神の紐帯こそが，彼らにとっての人としての最終根拠であった。

3．作品の非融和的自然表現

厚田の聚富（シップ）と当別（トウベツ）にかけての地は，石狩―千歳―勇払に広がる石狩低地帯の北端に位置していた。太古の地殻変動の結果，その地は壮大な低地として形成されていた。今から5～6千年前の縄文時代中期に海面上昇がピークに達する縄文海進のため，その地は海面下の時間が非常に長く，水分過多・過酸性の土壌が続き，疎林あるいは無林の大泥炭地･湿地帯を中心として広がっていた。さらには日本海の湿気を豪雪として降らせるアジア大陸からの北西風の通り道でもあった。つまりその地は，北海道において最も過酷な自然の地であった。

彼らが最初に定住を試みた厚田の聚富（シップ）の自然は，農業に全く不適な土地であった。明治4年（1871年）5月1日東久世開拓使長官巡覧の際の長官一行が，「眉をひそめた」[13] ほどの荒れ地であった。そのような不毛な土地を与えられたことに対する家臣団の怒りは，一種の集団ヒステリーとも言い得るものでもある。

彼らはシップ（聚富）の自然に接して，岩出山とはあまりに異なるその自然に拒絶感を抱き，全く受け入れることはなかった。玉目三郎の遭難死という当初の悲劇が，猛威をふるい被害を及ぼす厳しい北方の自然の実体を如実に体験させる。得体の知れない異界的な自然認識を彼らは保持すべく余儀なくされる。その厳しい北方の自然の実体について，以下列挙したい。

①明治4年5月早朝に家臣団の人々は，居住していたシップ（聚富）の地があまりにもひどいい荒地ゆえ新たな地を求めるため，原生林をトウベツ（当別）に向けて踏査を行う。彼らは，自然が猛烈に跋扈する果てしない原生の森の山越えを強行するが，最年少の玉目三郎が案内人とともにいったんシップ（聚富）に戻る途中に，二人は丸木舟で原始河川そのままの石狩川を越えようとする際に，転覆し濁流にのまれて遭難する[14]。

②泥炭地の広がり

「沼から来るという川は，その沼川の口にあたって，とまどい流れ，水面をひろげて低い岸にあふれあがっていた。疎らになり，やがて，痩せた灌木となるヤナギの木も姿を消した。あとはまた茫洋としたヨシの草野であった。地下茎の上に地下茎を伸ばし，その上におのれの葉や茎を腐らかし，またその上に根を張り，葉をしげらし，枯れ頽れ，── 積みあげ積み重ねた数えきれないほどの春夏秋冬が，踏めば沈むような低位泥炭地をつくっていた。水はその土の隙間をとおって散らばり，随意なところに淀んで沼となっていた。」[15]

③北西風に痛めつけられた土壌

「辛うじて許可を得たその土地では開墾の見込み

が立たなかった。前の年の経験が痛々しいのだ。携えて来た種子は何ひとつ実らなかった。風土の変化ばかりではなかった。赤い土はざらざら手から洩れ，冷たい風が終日海から吹きあげ，針葉樹も満足に育たないような荒れ地であった。彼らの顔に浮ぶ不安と動揺は見のがせない。」[16)]

④玉目三郎の遭難

「飛沫をあげて流れる巨木が，おもい重量と，いきおいづいた加速度でまっ直ぐに奔っていた。偶然がその舟と衝突させたのであろう ── しぶきがちらちらと見え，ふいに何もかも消えてしまった。ごうごうと底鳴りをしている川に，濁流は漫々としてあふれている。」[17)]

⑤石狩川

「目をひるがえすと，青い海のなかまでそのイシカリ川がのさばっている。年中澄むこともなく泥土に汚れている水は，先日来の氾濫のなごりを見せて一層重々しく濁り一層猛々しく押しだして行った。海水とは容易に混ろうとしない。はっきりけじめをつけた異質の水は，当分のあいだ，海の中にその川を描きわけて見せる。」[18)]

家臣団の歴史的任務は，実は産業革命の〈資本の論理〉に従う北海道開拓への貢献であり，国内植民地の確立と発展拡大であった。しかし彼ら自身にとっての移住の根拠は，消えゆく伊達家岩出山伊達邦夷一門を北海道の地で再興することであった。それが，絶望的状況の中で彼らを開拓へと招き寄せる精神的根拠であった。北海道において岩出山というふるさとを再創造するという情熱こそが，彼らの北海道居住の根拠であった。彼らの思いの先には常に岩出山があった。

岩出山の土地に対する血肉化までしたこだわりのもと，岩出山家臣団は，北海道の地と自然に対し固く心を閉ざしつつ移住してきたのであった。北海道の土地の自然風土，人そして文化に対し頑なに拒絶する視線，自己にとっての北海道の風土との異邦性を前提とする植民者の視線に彼らは立っていた。その結果，彼らは当初自然を見ているようで見ていない様態を取っていたのである。つまり無意識に北海道の自然を拒否していたのである。その拒絶する視線こそが，苛烈で厳しい自然表現を生み出しているのである。

4．作品終末部における融和的自然表現

①高倉を救う自然

「彼は見つめた。風はふッと，いつか，おどろくほど突然に落ちていた。そして夜が明けていた。曠野は明るみにさらされた。どこか遠く ── ほの青い煙のようなものが目にはいった。『家がある』それは声にならず，しかし彼は絶叫して穴からとびだしていた。だが何処にも見えなかった。まッ白い雪の巨濤がそのままの形でぴたりと停止していた。」[19)]

②春の石狩の自然

「けれども季節は手違いなくめぐって来た。雪は上から陽光にいためつけられ，地から萌えるぬくもりに擽ぐられた。いたたまれないのである。冬は，もはやその座を次のものに譲らねばならなかった。存在を許されぬときになっていた。」[20)]

③赤ん坊の周りに豊かに広がる自然

「『ほーらほら』玉目トキは猿のような顔をした嬰児に遥かイシカリ川の港町のあたりを見せようとした。ぐにゃぐにゃした嬰児はつぶった目をしかめただけであった。まぶしい春の陽が強すぎるのだろう。けれども若い母は云いつづけた。独りこの丘に立って，歌っていた。」[21)]

上述した「3．作品の非融和的自然表現」から，この「4．作品終末部における融和的自然表現」への自然表現の変化には，自然を見る主体側の意識の変化が反映されている。主体の意識の変化が自然風景を眺める視線に影響し，自然表現の変化を結果しているのである。その背景について以後論じることになる。

5．岩出山帰郷における〈ふるさと〉との離別

「商埠地のオダル港に出て彼は廃藩のうわさを聞いた。イシカリ役所に立ちよって，見知りの役人にわざわざそれを確かめた。そして，その噂は決定的な事実となった。」[22)]

明治4年7月に廃藩置県が施行され，全国の藩が解体された。廃藩置県制度は，地方制度改革を超えるものであり，全国の社会的布置の抜本的組み換えであり，日本における〈資本の論理〉の活性化に適う，近代社会構造に向けた抜本的制度変革であった。それは旧来の日本人の精神の拠り所を捨てさせるものであった。

その代替えとしてやがて提供されたなじみの薄い天皇主義は，資本主義体制以前の時代における旧態依然たる封建的イデオロギーよりもさらに以前の，まさに古代的質に満ちるアナクロニズム的非合理性に依拠し支えられるものだった。それは，近代資本主義の一見合理的に見える外観とほど遠い，古代の架空なる始原へと時間を遡る無時間的幻像に満ちたグロテスクなものであった。

天皇主義においては，歴史的時間を遡る時に必ず

立ち現れてくる動物的血なまぐさい死闘の多くの事実は，見事に反故にされ，精神的神秘主義の一見透明なベールに仮装化されている。制度自体に矛盾あるいは齟齬が多く，制度の流布・普及の過程で社会的齟齬，つまり社会的な無理強いを多々生み出すことになる。

「主君邦夷を中心にしていた家臣の一団が，そのとき，紐帯を断たれ，個々ばらばらきり離されたのである。もはや人々は，一人々々，その頭数によって，開拓使即政府に，直接結びつけられてしまった。」[23]

廃藩置県で日本人が失った国を機軸とした社会的紐帯や精神の拠り所の，その代替えイデオロギーが与えられることはなかなかなかった。「欲も得も無くなっていた。おのれが無になっていた。何か無限なもののなかにぽッと嵌り，または，おのれのなかにその無限なものが隙間なくおさまっていたのだ。」[24]

この空漠感情は理性によって生み出されたのもではない。より深い意識の深層から沸き起こる無の感覚と言ってもよい，根源的な無への転落である。

世界を見る視線を形成するのは意識である。意識がいわばカメラとなり，カメラの持つ視線に対して世界が人間に映じ，意識というカメラは映じた像を映す。人の意識こそが世界・自然を眺めて，写し出された世界の印象を，人間自らが還元的に獲得することで世界像を得る。世界から得た印象は，意識が生み出す印象であり，印象のなかに意識独特の視線性が潜んでいる。意識は人間の恣意性を超えて世界を見つめさせる実体的存在器官として機能し，意識は恣意性よりも体験性により形成される。

廃藩置県は，自己の生の最終根拠が消失し去っているという絶望感をもたらすものだった。時代環境が自分を簡単に見捨てて，自分が暗黒の中に放擲され漂っていたとでもいう，寂漠とした虚無の淵に投げ出された感慨を与えるものだった。

時代から見捨てられ放擲されたという意識は，北海道移住以来始めての岩出山帰還時に発覚した，阿賀妻暗殺計画の事実でより強められる。

阿賀妻が主導する岩出山家臣団の北海道移住には，岩出山の家臣団の中でも反対する者が多かった。明治4年春の第一回移住は，反対を無理に押し切っての断行でもあった。約半年後の主君邦夷らの突然のその帰郷に際し，岩出山家臣全員が集まって邦夷らの一時帰還の宴が行われる。その際阿賀妻は幾人かの家臣に呼び出される。移住反対の反阿賀妻派の彼らは，邦夷が北海道に戻るのを阻止しようと，阿賀妻の切腹を強要する。

しかしこの企ては，「阿賀妻は，彼ら平藩士の一隊が束になって当っても，ちょっとどうすることもできない出来ない程の人物である」[25] ごとく，阿賀妻の毅然とした対応で失敗に帰する。しかし，この事件は残酷な仕打ちであった。

岩出山に生きたいという願望はもとより，心の底から澎湃と生み出されるその地への心のこだわり一切を，彼らは苦い思いで捨てるしかない。彼らは暗殺事件によって個別岩出山から，彼らにとっての最終根拠の地である岩出山の地から自分たちが拒絶され打ち捨てられ，空無を舐め，闇夜へと追い立てられていたのだという事実を知るのであった。

こうして明治4年9月から翌年2月にかけての移住以来初めての帰郷において，家臣団の人々は，岩出山に残るふるさとの人々との決定的な断絶を体験する。北海道の地において彼らを岩出山へ引き寄せていた磁力は，まさに岩出山の地であたかもくり抜かれたように消え失せ，岩出山との心のつながりは霧散し，いよいよ彼らは，自分たちの船の手綱が切れて真の難民となり，自分たちが真にさまよい始めたことを感じたのであった。

「今度はあのイシカリの廣しい野を焼けつくよう思いで考えていた。」[26]「そこに彼らの定めた家があったのだ。」[27]

彼らは真の流民となって心の空虚感を抱きつつ，北海道の当別に帰還することになる。流民となった彼らの心の根本的な空漠感は，その帰還のさなかに彼らの心を埋め尽くし，彼らの心の垢を洗い直してくれたのである。その空漠感こそが空白の心を改めて提供し，その状態の中から，自分たちの根拠を打ち立てるべく純粋な試みが生まれることになる。

6．実証主義者堀盛

明治政府は，復古思想と大国家思想というイデオロギーを奉じていた。大国家思想は富国強兵・殖産興業という国家目標に結実したが，その二つの目標は，実証主義思想の理念の具体的表現であった。明治国家は，文明開化という西欧に対する実証主義的コンプレックスあるいはその物質文明に対する過信と盲信に，政治政策の基本を置く体制であった。

実証主義とは，産業革命を終えたあるいはその渦中にある近代国家における主導的でかつ基本的な社会意識であった。実証主義思想の唱道者19世紀フランスの哲学者コントは，実証的という言葉に，「〈現実的〉〈有用〉〈確実〉〈正確〉〈組織的〉〈相対的〉」[28]という六つの意味を込めている。産業革命が求めまた生み出しそして駆動して行くことにまつわる，楽観的，前進的，具体的，明瞭な，役に立つ，物質的，

機械的なといった形容が冠せられる社会意識である。

作品『石狩川』が描く当時の開拓使札幌本庁主席判官は岩村通俊だった。しかし北海道開拓行政の実権は東京の黒田清隆が握り，札幌での黒田の右腕が黒田と同じ薩摩藩出の官僚堀盛であった[29]。

堀は，史実では北海道の人物史上で怪物と目される堀基である。彼は，明治国家を代表する合理主義的で現実感覚の鋭い実践家であり，西欧産業革命を実現させ近代の扉を開き，さらには近代を担い続けた実証主義の，日本における代表的人物である。彼と並ぶ代表的実証主義者が，金子堅太郎や福沢諭吉である。堀は，後に現在の JR の源流，北海道炭砿鉄道会社を築き上げ，北海道長官に次ぐほどの，あるいは長官を超えるほどの権勢をふるい，北海道の副王と称された人物である。

「しかし，立ちはだかった彼は待つ間もなかったのだ。『やァ阿賀妻さんですか？』と出て来た男は，『どうぞ，どうぞ』と十年の知己のように気軽にさし招いでいた。そこは板敷になっていたので，彼は草鞋を脱ごうとした。相手は手でおさえた。『そのまま，そのまま』。目をあげた阿賀妻と，彼を見おろしていたその役人は，ぱったり視線がぶっつかった。紺絣白に小倉袴のその男は，ちょっと羞むように早口に云った。『拙者ホリ・サカン』」[30]

堀は，自らの手腕に絶対的自信を保持し，国家の具体的方針の実現になりふり構わず献身する有能な人物であった。現実の個々の事態から始まり，時には時代さえをも自分の主体的力量を駆使し切り開く実践活動家であり，旧来の何ものにもとらわれることのない，実証主義的個人主義の生き方を追及する人物であった。

「長官は範を求めてアメリカにまいりました，文明開化のお雇い教師を連れてきました，間もなく技術者がこちらに参るでしょう，阿賀妻さん ── 計画は実行を伴わなければ，そして，こういう実行は，二年や三年では芽が出ない」[31]。

19 世紀産業革命の栄華に酔う人々は，ダーウィン進化論の影響 ── 主にその曲解 ── によって，産業革命以後の西欧物質文明を唯一無二の高度な文明（明治期における文明開化の言葉の意味）とし，その文明に立脚することに最高の価値と絶対的な優越性を認めた。彼らは，西欧物質文明の前進と拡大を追求することこそが，人類の進歩と向上につながり，そうした実証主義的時代の順調な経過により文明は確実に進展し，より豊かなより満足できる生活が得られると，妄信した。西欧物質文明を絶対化し，その範疇外の他のすべての文明を，西欧物質文明の一方的な根拠に従って判断し，劣った不毛な非文明として扱う。

しかしこうした実証主義的価値観も一つのイデオロギーである。絶対的優越性を確信する排他的イデオロギーは，冷酷無比な政策や対応を招くことが多い。堀とならぶ実証主義者金子堅太郎の懲戒主義は，明治期北海道の集治監における囚人に対する非人道的な扱いを蔓延させた。

このように，実証主義は，人や生きる自然を数・機械として把握して処理し，生きる者の生命性や人権を無視する傾向にある。人としての尊厳や命の価値さえをも認めぬことが，むしろ産業革命を見事に完成させ，近代を創出した原動力ともなったのである。冷酷無比で自己本位で危険な可能性を常に胚胎する，そうした実証主義こそが近代の支配的イデオロギーである近代主義となって，強固に蔓延し，現代まで続いている。

「この一刻に，占領されたとしたらどうなるんだ ── と，それほど切迫した事態であっても，おぬしらは，女房，子供，どうのこうの，と，── これだから，旧時代のものは始末にこまる」[32]

しかし樺太がロシア人によって占領された時，人間として最も守らねばならぬし守りたいのが肉親であるという人間的いや動物的本能をも，人は相互に理解すべきである。機械や数では割り切れぬ，それらを超えるあるいはそれらの範疇外にある人間的な深い意識･無意識により，人は多く支えられている。人間存在に対するやさしさが，実証主義者堀には基本的に欠けているのである。

しかし堀のけれんみのなさがポジティブに発揮される場面に出会うたびの，旧来の岩出山主義つまり邦夷への忠誠をはじめとする旧来的価値観の精神的呪縛の霧が，あざやかに晴れるようなある種の爽快感を，阿賀妻は抱くのであった。

しかしそもそも実証主義は，新たな自然に対する人間精神の強固なかつ新たなる身構えでもある。自然への自己防衛が道具としては機械とそれが生み出す製品であるとするならば，人間の精神・思想・意識の上での自然に対する自己防衛手段が，当時は実証主義であったのである。新しい自然に対する人間側の対抗手段としての，新しい強固なイデオロギーであった。

つまり，人が北海道のような新しい自然に対する時，それまでの自然に対するのと同じ形で対応するのは不可能であり，自然に対する心の組み換え，自然観の変更そして意識改革がなされる必要がある。

「はじめて開拓使庁に乗りこんだとき，堀盛なる青書生のあの役人が最初に云った言葉が，『狭い，狭い――』という頭からの否定であった。そう叫んで，彼は阿賀妻の拵えた地割りの図面をのびのびと訂正した。新しい時代に新しく起すここの農業は，旧藩に於ける農業の概念を当てはめることは出来ない。そんなものは，さっさと捨てなければならぬもの。」[33]

阿賀妻は堀を介して，北海道の自然に対する新たな自然観への組み換えの必要を瞬間的に衝撃的に感じる。「乗りこえて行く時代の響きを，頭上に――ひらめくように聞いた。」[34] というように，新たな自然の新たな時代に向かう精神を堀に感ずるのであった。

一人の個人が，時代の面する困難を，他でもない自らの手で主体的にさばくその鮮やかな言動と行動に，阿賀妻は新しい時代の使者を迎えたかのような羨望さえをも感ずるのであった。そして，人の情的なもの人間的なものの混入を拒否して，自らの任務と目標達成に冷酷無比に邁進するその姿に対し，旧時代に閉塞的にこだわる自らの頑迷さ，新しい時代の風に乗ることのできない自分の姿に，哀れささえをも感ずるのであった。

「呼ばれて目をあげた阿賀妻は，見おろしている堀大主典のかなしげな眼を見た。それは不思議な――お互いの腹のなかでうんうんと頷きあう了解の目つきであった。」[35]

堀に対し阿賀妻は，言葉にはならない不思議な共感を抱くのであった。しかしその共感は，自己の自立化による主君との旧来の絆の破棄，つまり岩出山家臣団の精神的解体をも伴うものでもあった。

7．北方系自然との対峙と個人主義の成立

「佐藤行信は蝦夷拾遺に書き記して云った――，『イシカリ川，その源は遠く山間に発し，委蛇として西海に入る，沿岸は渺漠たる大原野ありて四方便利の地たり，これを開かば一大国府となるべし』ついで，著名な探検家であった近藤重蔵は時の政府に『イシカリ川の義は，総蝦夷地の中央第一の大河にして，水源までおよそ百里の間，左右うち開け候平地沃野のみにて樹木鬱茂，夷人所々に住居，川上まで，夷人粮魚おびただしくこれあり』と書をたてまつった。」[36]

「雪の絶えないヌタクカムウシュペの裾を西に折れ，山峡の低みをかけおりた水は急湍となって川上の浸蝕谷をよぎる。やがて盆地の水々を集めて西の壁である中央山脈に突き当たった。かたい古生層の岩角をつき破って湧き立つ奔流となり，イシカリの野に噴きだした。そこから南に下って一帯の凹地を回転しながら流れて行った。幾度となく河床を変え，三日月なりの水溜りを置き去りにした。」[37]

想像を超えるほど長きにわたって豊かな原生自然の懐にあった北海道内陸部は，明治の時代に入ると，その内陸部の自然の様子が，人々に突如衝撃的に打ち開かれることになる。岩出山の穏やかな自然とはあまりに異なる厳しく取り囲む自然，人間の時間・空間感覚そして力量をはるかに超え圧倒する自然が，北海道では悠然と広がっていた。それは，太古から自然が自らを営々と築き上げた結果としての，自然の王国であった。

人間の歴史とは，自然との関係づくりの歴史である。歴史における時代区分というものは，根本的には人間が自然に関与する関係の社会的差異による区別化と言うことができる。歴史の時間的継続の中に随時発生する歴史の断続こそが時代更新なのであり，それは新しい自然の発見という歴史的ファクターから生み出される。

北海道に着いた本州からの開拓民の多くが，巨大な高さと広がりと奥行きを示す原生林が，まさに原始そのままの巨大な空間として，自分をびっしり取り囲んでいることに茫然自失した。新しい自然に茫然自失したこの事態こそが，実は時代更新が着実に始まっている証しであり，その象徴的事件なのである。

「ずいぶんと歩いたのである。道もない険阻な山を掻わけて登り，水の音を聞いてこの谷に降りて来た。藪と木の根を伝い，岩をとび越えまた水の中を押し渡り，砂礫を踏みつけた。午食を使って間もなく，踏みぬいた草鞋を履きかえた。」[38]

茫漠として密に広がる原生自然の真っただ中で，行く手を阻む自然との闘いによってしか，彼らにとって生きる術はなかった。経験したことのない，いや知ることさえもなかった過酷な自然のただなかに，底なし沼に呑み込まれるかのように彼らは呑み込まれて行く。そして猛烈な原生林のなかを方向も定かではないまま，苦しい山越えをするそのさなかにこそ，彼らは，自分たちが見えない強制力によってこの大自然の中に送り込まれ，しかも退路を断たれている状況下にあることを痛感する。

北方系の厳しい自然に立ち向かう時に，人は自然をより明確に意識化する。それとともに，自己自身とわけても自己の非力を実感する。過酷な自然に対する防御あるいは対抗手段が整備され，自然をむしろ凌駕する機械等の技術力を得ている時代と違って，当時の人々は，農業用道具としては，基本的に

は鎌，鍬あるいは鋸しかもってはいなかった。それは自然に抵抗しそれを超えるレベルにはほど遠い装備であった。

例えばヨーロッパ中世において，人々は，自然の中から突如湧き出すように発生するペスト禍に対し，逃れるという対抗策しか持たなかった。危険な場所から即座に逃げる，そして危険な場所には絶対に近寄らないということしか，危険な自然に対し取り得る手段はなかった。日本の江戸期までにおいても，人間は荒々しい自然を避け続けて，危険性の少ない温和な自然地域にのみ肩寄せ合って生活していた。それがいわゆる徳川の平和の実態でもある。

しかし生物学的に言えば，種の存続には種の生息圏の拡大と，それに伴う種の多様化が不可避であり必要である。つまり江戸時代の人々の生活の穏やかな閉鎖的安定性は，人間の種の存続のための発展・拡大の流れを途切れさせ，生息圏拡大の停滞あるいは停止をもたらす。それは自然の自然的発展を阻害する絶対的に不自然な事態なのである。

江戸時代における人間の種の発展の停滞や停止という不自然な事態は，明治維新による産業構造と社会全体の早急な組み換えによって，必然的に打破されざるをえなかったのである。自然の発見が時代さえをも変えるのである。

その江戸期においては,科学の未成熟さも加わり,中世の否定的自然観が浸透していた。前述のように,人智を越える自然の場に人は近づかず，対立し闘わなければならない自然は，身近には存在していなかった。人は，自然に従い自然と一体化していた。自然が実りとして供与するものを収穫物として従順に獲得しさえすれば，少なくとも生きていくことは出来た。人々は，威嚇する大自然に生身の体を呈して踏み込み戦うことがなかったし，その必要もなかったのである。

しかし前述の富国強兵・殖産興業という標語のもとで，産業革命を期する近代日本は，工業資源の安定的獲得と急増する人口を維持し支える農産物の安定的増産を目指し，〈資本の論理〉にしたがって人の生息圏の拡大を一気に積極的に図る。〈資本の論理〉が求める産業革命の成功と，その精神的支えたる実証主義理念の社会的実現こそが，明治国家の歴史的使命であった。

こうして，それまで見向きもされなかった荒々しい自然地域にも人は拡大的に侵入・侵略し，獲得した土地を我が国の領有地として，やはり〈資本の論理〉にしたがって道路を切り開き，鉄道を敷設し，橋梁を設置し，建物を建て，入地し，森林を完全に伐採し，畑を作り耕し，土壌を改良し，鉱産資源を発掘し本州に向けての簒奪を繰り返した。つまり人々は，当初は個人でやがては会社組織の形で，太古以来の自然が生み出した豊かな自然資源のなかを跋扈し，それを荒らし奪い去ったのである。

ニュージーランドの北島・南島などと並び，様々な資源の獲得に狂奔する本国によるすさまじい破壊が，北海道をも襲い激変させたのである。

産業革命の世界各国は，世界へのあるいはそれまで産業上では手付かずであった国内の異邦の地域へ，〈資本の論理〉にしたがって進出し，国内･国外植民化に狂奔する。

自然環境そして風土性の点で〈他界･異界〉であった地域への進出は，他者・他民族・他人種あるいは異種の自然との出会いと接触を生み出す。他者とのこの接触や出会いこそが，他国の人間･文化･歴史･自然に対する関心を生むとともに，それまでは意識されていなかった自己と自国の文化・自然に対する客観的な視線をも育む。他我的な異邦的なものとの接触こそが，自我主義・個人主義という自意識を成熟・発展させる。こうして世界のあるいは国内でのグローバル化の波の中で，個人主義・自我主義が次第に胚胎し成長して行く。

産業革命の技術革新は，発見された地に広がる新たな別な質の自然に対する，人間側での対応策とも言える。イギリス産業革命期前に，人々の前に明確に立ち現われてきた不毛の北方泥炭地の生産効率・利潤取得を高めるため，つまり〈資本の論理〉の価値観にしたがってもうけをより多く獲得するために，羊毛飼育が広まった。北方寒冷地に生息圏を拡大しつつある人々は，新たな土地での自然対応として防寒服を大量に必要とするようになる。防寒着のための工場原料供給のために，囲い込みによって下層農民を都市へ追い出し，その後に羊毛生産が開始された。

それは，産業革命を境に一挙に生息圏を拡大する人類が,新たに入地した寒冷地の不毛な土壌という,厳しい自然に対応する新しい農業であった。それは新しい自然に対応する人間側のいわば大きな変化であり，新しい自然を意識しそれと戦い，その地の自然の自然性に対応する営みこそが，羊毛農業だったのである。

北海道の酪農や寒冷地農業もそうである。産業革命による人口増大とその人口を支える食料供給確保の中で，北海道の江戸期までとは全く異なる新たな自然と厳しく戦い格闘し，その自然との格闘から生産利潤の獲得を目指すべく，酪農あるいは寒冷地農

業の技術を人々は開発・発展させた。

明治中期の北海道伊達における田村顕允のビート工場の開設，東京青山の開拓使農事試験場における津田仙による北方農業の研究，同じく津田仙による東京麻布本村町における学農社の開設，新渡戸稲造の北海道篠津原野における泥炭地の土壌改良の研究，彼の愛弟子高岡熊雄による北海道内の土壌の調査と研究，そもそも寒冷地である北海道の農業について，稲作の禁止と酪農業推進という政策を開拓使が選択したこともまた，技術革新を介した新たな自然に対する新たな挑戦であり，北海道の自然の威力を示すものであった[39]。

それらは，北海道の地の厳しい自然に対する客観的で透徹した意識と，その自然性を十全に意識した上での果敢な戦いだったのである。

新たな自然に対する戦いは農村における村落形態を変える。近代農業は旧来の農業の集約型の村落形態ではなく，分散型の形態を示している。つまり，中世まで着実に広がっていた農業地域の，その外側に広がっていた広大な地たとえば泥炭地域の開拓は，中世共同体の村落集約型の農業ではなく，個々人が家族を単位とし，主体的に自然生産活動を担う個人主義の農業理念との対応のなかで，村落の農家家屋が分散型で形成されることで成し遂げられている。

産業革命の波の中で，農業の工業化も急速に進められた。農業従事者が，畑という工場で作物という製品を大量に生産し，流通させ販売し利潤を上げる。農民が工場主の立場となる。農業生産者がまさに工場主として主体的に担うべき生産形態が求められ，主体的個人労働が基本となって行く。

こうした主体的個人主義を北方農業は農業者の基本精神とする。〈Boys, be ambitious!〉という北海道開拓に向けたクラーク精神は，北方系自然と共生的に闘う精神性を見事に象徴している。人に厳しく対立する北方系の自然は，個人の主体性を涵養し，主体的個人主義によって厳粛な自然はそれとして受け止められ，対応を得るのである。

自分のために自分の生を他者に捧げること，自己の救いのために神に救いを求めることが，私的な個人的な汚れ，仏教で言う煩悩を払拭した，純粋な生を育む力となる。近代社会を生み出す原動力をM.ウェーバーは，禁欲的プロテスタンティズムの精神つまり神に対する救いを求める信仰を，勤勉で禁欲的な日常労働における勤勉さという具体的活動に求めた[40]。それが，初期資本主義を支える人間精神の原動力となったという。

プロテスタンティズムの文脈にあるドイツ敬虔主義のシュペーナー，ヘルマン・フランケ，アーノルト，ニコラス・ルートヴッヒ，そしてクリストフ・エティガーらに共通するのは，教会に依拠しない聖書を介した個人の信仰覚醒の姿勢であり，原始キリスト教的な再生の概念，強い自己意識，再生した者の連合（霊的共同体），神により救われる者としての全信徒の平等性，経験の重要視，聖書主義が挙げられる[41]。こうした敬虔主義は，やがては内村鑑三の無教会主義の成立にもつながる。

北方の寒冷な風土の中での信仰は，対立する自然との戦いの中で，人間自身における内面的覚醒そして個人主義を生むことになる。北海道の開拓を成就させた人々としては，伊達藩岩出山主従や同じく伊達藩亘理主従などいくつかの家臣団の主従グループや，その一方でキリスト教集団も多くいた。キリスト教プロテスタンティズムという，自己の救いのために神に奉ずる犠牲的精神に結ばれ，一人一人自立する個人主義的信仰者たちこそが，過酷な自然とほとんど素手同然の状態で闘い，豊かな大地を創造した。勤勉なる犠牲的労働の積み重ねの彼方に神の救いを求める信仰こそが，北海道開拓を支え，基礎を築き上げた精神であった。

つまりM.ウェーバーの言う禁欲的プロテスタント倫理は，個人が主体的に生産労働を担う倫理を宗教論で指摘するものである。その倫理は，イギリスやドイツの北方地域あるいは北欧諸国における，近代において開拓された泥炭地・湿地における近代農業発展にとくに多大に貢献するものであった。上述した〈Boys, be ambitious!〉も，こうした個人主義的プロテスタント倫理観に支えられるものである。

「そのうちに彼らは，主君邦夷の笠の緒が垢によごれて黒んでいるのを発見した。これは全く発見であった。彼らは目を瞠った。（略）。そこには阿賀妻がいた。彼のそげた頬には無精ひげが風にしなっていた。女どもは嗚咽した。」[42]

シップ（聚富）――トウベツ（当別）間の道路開削のための集団による肉体労働は，「土民」（土の民）[43]として北方系自然との闘いがもたらす豊かな可能性を示す。しかしそうした労働の中で，主君邦夷の襟元の汚れと阿賀妻の無精ひげの発見は，人々に悲しい驚きをもたらす。その悲しみは，その二人と団の人々とがいまや平等化され平準化されていること，二人に対する人々の目線がすでに横並びに並列化し，従来の岩出山主義の縦の信奉性が，目線から除去されている事実を，自らが認識した悲しみでもあった。

彼ら二人は，彼らが過去にもっていた位階的な上下関係の余韻はいまだに与えつつも，具体的には集団を支える二人の構成員としてしか把握されてはいない。家臣団内での平等化が，あからさまに，しらじらしく進行していることを上の場面は示している。

また石狩税庫の建設の場面では，シップ（聚富）の開墾小屋から毎朝イシカリ（石狩）の税庫建設の工事現場へ，60名を4手に分けての工事が盛んに進展する。そこでは玉目トキや高倉祐吉らが，主体的に平等に寄与しつつ労働に奮闘する様が，生き生きと描かれている。主体的個人主義理念の具体的行為としての，誰のためでもなく自分自身のために，自分たち自身の力で主体的に生き働く純粋さに満ちた躍動ぶりが，展開されている。

過酷な北方系自然は，個人の個人としての営み，自然との格闘における個人の主体的犠牲的労働を強く求めるのである。そもそも近代労働そのものが，近代の個人主義という個人の主体的な受け入れ基盤を実現するものとも言える。

封建的家臣団の主君を奉ずる呪縛的精神性ではなく，自己―対象の二項対立の純粋な図式を取る個人主義に依拠することによって，彼らは自己の透明な視線で，世界・自然を直視する視線を得ることになる。様々な煩悶・呪縛を脱した汚れのない意識と視線の中に，自然自体が生身の姿となって映えてきて，自己の面前に明瞭に立ち現われて来る。

自然と自分との関係化がなされ両者がしっかり結合されることで，人は初めてその地に自らの根を自らの生の錨を下ろすことができるようになる。自己の生を生きる場を得て，自分の生を具体的に展開する場を確保できるようになるのである。こうして「屈辱なく死を托するにたる」[44]，つまり生そのものを托するにたる土地を，トウベツ（当別）に定める決意を彼らは得るのであった。

8．おわりに　共同体主義（コミュニタリアニズム）

こうして，岩出山家臣団の各自が一人一人の個人となって全体がほどけ，その離在状態の中からやがて自我の主体性への意識が発酵し，次第に明確に立ち現れてくる。自然のなかでの土民（土の民）として自らを意識し，自らの力で主体的に生きようとする決意が，空白となってしまった心のカンバスの上にやがて立ち現れてくる。

近代における自然の発見は，精神上では人間の主体性の確立に伴う現象である。江戸期の閉塞的密閉集団性が解体し，武士という非生産の特権的立場を保証する共同体を失った彼らは，その無所属の空漠とした感情のなかで，植民者としての視線を超えてそれを大きく変えるに至る。

「今のところこれは，どこまで続くか判らない距離を，それをどこまででも追いつめて行こうとしているのであった。生きて，呼吸の根のつづいている間，溝を掘りモッコを担ぎ，胴搗きをくり返して悔いない静かな澄みきった表情になっていた。」[45]

集団による肉体労働の汗と涙の豊かな手ごたえは，今をこの地で生きる自然共生への豊かな収穫となる。主体的労働の価値が岩出山イデオロギーに代わる彼らの新たなる価値観，その紐帯となる。土・自然を相手とする，誰のためでもなく自分のためにする労働が醸す充実感の体験こそが，個人主義の具体的結果となる。

初めての岩出山帰郷のさなかに起こった阿賀妻暗殺計画が未遂となった直後，阿賀妻は歌を詠む。「噫我赤心欲報国（ああ我は国に尽くそうとする心はあるが）」と起して，「蓑笠独耕石水浜（さりゅう独り耕す石水の浜）へと変わり結ばれる[46]。「石水と云えば，彼には，茫洋とした石狩川の流れが見えてくる。その畔りにある膏ぎった処女地も浮んでくる。」[47]

歌の文意には，自己と自己の生を見つめる視線の成立と，生の根拠を，〈ここ（石水の浜）〉で〈今〉を自然との一体化の労働に置く決意がうかがえる。その労働の積み重ねこそが，岩出山の自然やその地に残る人間集団との完全な断絶の空漠感を埋めるものであり，労働の積み重ねの彼方に，新たな自存の場つまり新たな故郷の創出が，生の根拠として新たに立ち現れてくるのである。

明治4年3月2日の移住以来の歳月，阿賀妻らは生きているようで生きていなったとも言い得る。自らの足を大地に付けることが出来なかったからである。自然とまみえ大地に根ざし大地の呼吸を吸引して，今をここで生きることこそが本物の生であるということの発見あるいは自覚を，彼らはいまや得る。自分たちの生を支える新たな根拠をこの地で確立しようとする，生の純粋なパトス（衝動・本能）が沸き起こってくる。

彼らにおいて岩出山主義のその集団性は，過去の歴史と場を今共有しているという外的事実性としてのみ残り，家臣団としての内実は解体している。解体された内実には，今や主体的個人の意識が大きく出現している。主体的個人をゆるやかに束ねる集団主義へと，彼らの組織は変質している。

「個人が共同体の文脈の中でこそ定立しうるという共同体主義（コミュニタリアニズム）」[48]が生み出

されてきている。集団があっての集団性から，個人があっての集団性へと組織の内実が変化・発展している。その集団は，近現代のゲゼルシャフト（産業社会，個人社会）におけるような個々人の完全な自立性と，封建的近世のゲマインシャフト（相互依存共同体）の二つの集団性を複合化させるものである。

〈邑則〉（戦国時代におけるような各国法）の制定等による旧家臣団の共同性は保ちながら，ゲマインシャフトの共同的体制の枠内で「労働する自己」を介した生産集団化を，彼らは構築し始めている。これは日本的伝統性を存分に残した新しい集団的生の在り方である。

自然･世界にそれぞれが自らの生を主体的に捧げ，石狩川と自然とを人々が受け入れ一体化し，この地を新たな故郷として築こうとする決意，その決意を有するにつれて，視線は主体的個人の視線へと変わり，その視線の変化の中で，石狩川の自然は明るく豊かな相貌に変わる。人々が自然を主体的に受け入れるにつれて，自然のほうでも明るく輝かしく彼らを祝福し受け入れるのである。

それが作品最後で描かれる，生まれたばかりの幼児を春の陽光がうららかに包み込む，石狩川のほのぼのとしたおおらかな自然風景であった。

また，「日向の山腹がとうとう黒い土になった。野の低み低みが青ざめて来た。雪どけ水が野の低みに溜るのだ。それは，せきたてるようにあたりの雪にひろがった。溶けた雪水の溜りは一日々々と大きく，いたる所に沼をつくった。粉のような羽虫がその上に撒かれた。汚れはてた雪が，陽と土の湿気に翻弄された。野のなかに流れ溜って，ふくれあがった青い雪水はやがて出口を見つけた。川であった。どッと流れこんだ。白い氷の上に青くひろがった。」[49]

自分の生の根拠をこの地へのこだわりのなかに見出そうとし，他者とのつながりのなかで，不可測な未来に向かう個人の主体的実存的営みが始まろうとしている。それは，主体的自我のパトスに満ちるものであった。

引　用　註

作品のテキストとしては，本庄陸男著『石狩川』上・下巻　新日本出版社 2001 年発行を使用した．

1）『石狩川』上巻 p. 18
2）『石狩川』上巻 p. 8
3）『石狩川』上巻 p. 120
4）小学館 CD 辞典『スーパー・ニッポニカ』［幕藩体制］の項
5）『石狩川』上巻 p. 12
6）『石狩川』p. 124
7）『石狩川』上巻 p. 105
8）『当別町史』昭和 47 年当別町発行 p. 36
9）『当別町史』p. 36
10）『哲学・思想事典』」岩波書店 1998 年発行 p. 790
11）『石狩川』下巻 p. 16～17
12）『石狩川』上巻 p. 143
13）『石狩川』上巻 p. 7
14）『石狩川』上巻第一章 p. 5～p. 47
15）『石狩川』上巻 p. 40
16）『石狩川』上巻 p. 6
17）『石狩川』上巻 p. 47
18）『石狩川』上巻 p. 62
19）『石狩川』下巻 p. 168
20）『石狩川』下巻 p. 186
21）『石狩川』下巻 p. 188
22）『石狩川』上巻 p. 236
23）『石狩川』下巻 p. 112
24）『石狩川』上巻 p. 223
25）『石狩川』下巻 p. 68～69
26）『石狩川』下巻 p. 111
27）『石狩川』下巻 p. 111
28）『哲学・思想事典』岩波書店 1998 年発行 p. 661
29）『石狩川』上巻 p. 183
30）『石狩川』上巻 p. 68～69
31）『石狩川』上巻 p. 85
32）『石狩川』上巻 p. 139
33）『石狩川』下巻 p. 8～9
34）『石狩川』下巻 p. 9
35）『石狩川』上巻 p. 192～193
36）『石狩川』上巻 p. 43
37）『石狩川』上巻 p. 42
38）『石狩川』上巻 p. 5
39）岩井洋著『空知川の岸辺で』2003 年北海道新聞社発行．p. 60～61，130，162～169
40）M. ウェーバー著大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』1997 年岩波書店発行 p. 289～p. 332
41）M.シュミット著小林謙一訳『ドイツ敬虔主義』教文館 1992 年発行
42）『石狩川』上巻 p. 243
43）『石狩川』上巻 p. 19
44）『石狩川』上巻 p. 20
45）『石狩川』上巻 p. 224
46）『石狩川』下巻 p. 67
47）『石狩川』下巻 p. 66～67
48）古川彰著『村の生活環境史』2004 年世界思想社

発行 p. 11
49)『石狩川』下巻 p. 186～187

（本論文は，2008 年 9 月 5 日に開催された江別市生涯学習推進協議会主催の平成 20 年度生涯学習リレー第 3 回講座「本庄陸男『石狩川』── 自然のなかの人間像」の内容を大幅に拡大・追加して作成したものである。）

Abstract

Ishikarigawa, a novel by Mutsuo Honjo, depicts the journey of the vassals of the feudal lord Kuninao Date of Iwadeyama, near Sendai, departing Iwadeyama in March 1871 and immigrating and settling in Tobetsu, Hokkaido. When the vassals moved to Hokkaido, the vassals had a very negative consciousness about nature in the north. However, by the end of the novel, they accept this nature and establish a cooperative consciousness. This study analyzes the transition of the consciousness which brought about the change.

The three factors that brought about the transition of consciousness are: (1) abolition of the Han (Clan) system and the implementation of the Prefecture system; (2) exchanges with the Western Modernist and Positivist Sakae Hori; (3) struggles with nature in the north.

The strong spiritual connection (based on feudalism or feudalistic vassals) of the vassals that respect Lord Kuninao Date, while retaining their form as vassals, progress into a group founded on communitarianism that is comprised of subjective individuals.

As the vassals individually and subjectively perceive one's world through their own eyes, they are able to move beyond the desolate sentiments toward nature they initially held, and establish a cooperative perspective by accepting their surrounding nature.